

ダムの問題点

田中 真澄

- ①堆砂 ②富栄養化 ③ダム操作 ④地すべり ⑤地域の崩壊 ⑥事業決定の手順
(アセスメント等) ⑦耐久年数?

これらを議論すべき

考えられる今後の方向

(1) 治水対策

① 治水方法としての従来のダム評価と代替案

ダムには環境悪化、地域の崩壊など大きな負荷がともなう。治水手段としては他の全ての方法を考えた上で最後の手段としてのみ考えるべきである。治水環境を悪化させてはダムをつくるという悪循環はやめるべきで、上流域の環境保全が最重要されるべきである。

② 上流域の対策

- イ. 山林の保水機能の保全と育成(広葉樹林など)
- ロ. 複数の小型穴あきダムへの転換(支川、中小河川)
- ハ. 多目的遊水地制度の活用検討
- ニ. 流域の開発規制(林地開発、宅地造成など)
- ホ. 汚染や水害の危険がある廃棄物の規制
- ヘ. 直轄河川、そうでない河川を問わず整合、協調の総合治水対策が不可欠

ロ. について

上流域の河川に有効である。複数の小規模な穴あき治水専用のダムをつくることである。普通のゲート付き調整ダムより自然調整式である。(下部にゲートのない排水孔)

利点をあげると

- ① 構造上簡単で工期も短く工費も安い
- ② ゲート操作が不要で操作ミスや故障の心配がない。

- ③ 管理上の人間も不要。
- ④ 堆砂や下流域の洗掘もない。
- ⑤ 汚染、汚濁の心配がない。
- ⑥ 環境破壊も少なく、河川の自然に近い水流が保たれる。

ハ. について

多目的遊水地制度

(建設省河川局都市河川対策室刊の抜粋)

第一章 新制度の必要性

一、都市河川における遊水地の必要性

(一) 都市河川の治水対策については、河道に洪水を集めて出来る限り早く海に放流すると云う従来の一般的な河道改修方式では、次のような理由できわめて困難かつ不適当となっている。

(イ) 都市部の密集市街地における河道拡中工事は地価の高騰による用地取得難、建設工事公害等の問題が多いため著しく困難となりつつある。

(ロ) さらに、一般的な河道改修方式では、莫大な費用と長い工期を要するため治水安全度が極めて低いまま長期間放置されることになり都市生活の安全性の確保の要請から見て大きな問題となっている。

(ハ) 今日、都市河川では河道だけで洪水を処理することは、一般河川に比較して異常出水時の被害を拡大させることになるので問題が大きく、むしろ一流域全体で治水効果を高め、危険の分散を図る必要がある。

(ニ) 地方、都市河川の流域全体について見れば、遊水機能を有する区域が数多く存在している。これらの遊水地は従来低湿地であることもあって農地として利用されている例が多いが最近の都市化の進展により、放置しておけば個別のかつなくず的に市街化(盛土埋立)され遊水機能が著るしく減殺される恐れが強い。

(ホ) 以上のようなことから、都市河川の周辺地域において遊水機能を有する区域については、積極的に遊水地として指定、整備して遊水機能を確保する必要がある。

(中略)

第三章 多目的遊水地事業費補助の創設

(中略)

三、補助率

遊水地は河川改修を行うのと同一の効用を發揮するものであり中小河川改修費補助と同率の補助を行うものとする。(一級河川2/3、二級河川1/2)

以上 治水上の環境保全対策や穴あきダム、遊水地制度など上、中、下流の連続性を重視した総合的治水対策が要求される。